

# 社会福祉士実習報告書における学びの分析

伊藤 恵美

武蔵野大学人間科学部

## I 問題と目的

社会福祉士養成教育のカリキュラムの中心となるのが「社会福祉援助技術現場実習」及び「社会福祉援助技術現場実習指導」の科目である。実習科目における教育目標の達成についての評価は重要な課題であるが、柿本（2004）は、実習評価は総括的評価と形成的評価を車の両輪のように位置づけるべきとし、形成的評価表を用いて学生と教員の面談による実習振り返りを積み重ね、常に個人の目標達成のため実習や授業へのフィードバックを繰り返し、形成的評価と総括的評価を相互に組み合わせて、評価を学生と教員が個別面談でこれまで何を学んだのか、またこれから何を学ぶか再確認をするために活用するとしている。総括的評価の対象となるのが、実習生が実習終了後に作成する実習報告書である。社会福祉士実習教育の学習成果に関する先行研究は、竹内ら（2009）が実習報告書の分析から、実習生が学んだ内容は社会福祉士の「技術」領域における「コミュニケーション」についての学びが最も多く、次いで「価値」領域における「信頼関係」についての学びが多く、次いで「技術」領域における「利用者の特性」と「関心・関わり」が多いことを明らかにした。そして実習施設種別による学びの内容の違いについては、児童施設で「関心・関わり」の理解が高く、障害者施設では「信頼関係」の構築、高齢者施設では「コミュニケーション」、公的機関・社会福祉協議会では「業務内容」が高いことを明らかにしている。

本研究は、実習生が実習終了後、事後学習を経た後にスーパービジョンを受けながら学びの集大成として作成し、実習科目の総括的評価の対象となる「社会福祉援助技術現場実習報告書（以下実習報告書）」に注目する。実習報告書において、教育目標の達成つまり社会福祉士に必要な価値観や知識や技術に関する学びがなされているか、実習施設種別による学びの違いがあるかを明らかにすることを目的とする。

## II 方法

社会福祉援助技術現場実習の前期・後期実習を修了した2年生32名のうち、研究協力を得られた21名を対象とし、その実習報告書の記述をテキストファイル化してエクセルに読み込ませCSVデータを作成し、Text Mining Studio Ver. 4.1（数理システム）で分析をおこなった。テキストマイニングとは、金（2009）や小平ら（2007）によると、文字（テキスト）という質的データを量的方法で分析する手法であり、質的なテキストデータに基づいたうえで、統計的手法を用いる量的な分析である。

語りのデータは実習報告書の構成様式に従い、1 はじめに、2 学んだこと①（以

下学び①)、3 学んだこと② (以下学び②)、4 おわりに、の 4 項目をそれぞれ 1 件のデータとし各 1 行として合計 84 件のデータを入力した。分析は(1)テキストの基本統計量、(2)単語頻度分析、(3)評判分析、(4)ことばネットワーク、(5)対応バブル分析 (6) 原文参照の順に行った。

### Ⅲ 結果

#### 1. 基本情報

表 1 は実習報告書の記述内容の基本情報である。実習報告書の様式「はじめに」、「学び①」、「学び②」、「おわりに」の 4 項目をエクセル表に 1 行単位で入力して筆者 1 名につき 4 行として全 21 名分で総行数が 84 行、平均行長が 329 行であった。総文数は 935 文で平均文長は 29.6 文であった。また、報告書における内容語の延べ単語数は 10617 個であった。

表 1 基本情報

	項目	値
1	総行数	84
2	平均行長(文字数)	329
3	総文数	935
4	平均文長(文字数)	29.6
5	延べ単語数	10617
6	単語種別数	2220

#### 2. 単語頻度分析

単語頻度分析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントすることによる分析である。図 1 は上位 20 位までの単語を表している。最も多いのが「利用者」で 434 回、「実習」は 191 回、「行う」は 136 回、「支援」「職員」は 130 回、「人」は 126 回、「自分」は 105 回、「施設」は 104 回、「生活」は 80 回、「学ぶ」は 72 回、「コミュニケーション」は 71 回、「考える」は 70 回、「大切」は 67 回、「関わる」は 51 回、「気持ち」「良い」は 50 回だった。

学び①の単語頻度 (上位 20 位) (表 2) においては、「自分」が 17 回と高く、実習施設種別別では「子ども分野」で 8 回と最も頻度が高かった。また、「職員」が 15 回で、特に「子どもの分野」で 7 回と最も高かった。そして「関わり」が 13 回で、特に「子ども分野」が 9 回と高かった。学び②の単語頻度 (上位 21 位) (表 3) においては、出現頻度が最も高かったのは「利用者」で 177 回、実習施設種別別では「成人分野」が 98 回、「老人」が 68 回であった。また、「職員」が 55 回と高く、「成人分野」で 24 回、「老人分野」で 15 回であった。次に「支援」が 48 回で、「成人分野」で 37 回、「老人」分野で 10 回であった。特徴的なのは、「関わり」で、学び①では 13 回で特に「子ども分野」で 9 回と頻度が高かったが、学び②で出現しなかった。また「情報」は、学び②では 22 回で特に「成人分野」で 14 回と高かったが、学び①では出現しなかった。

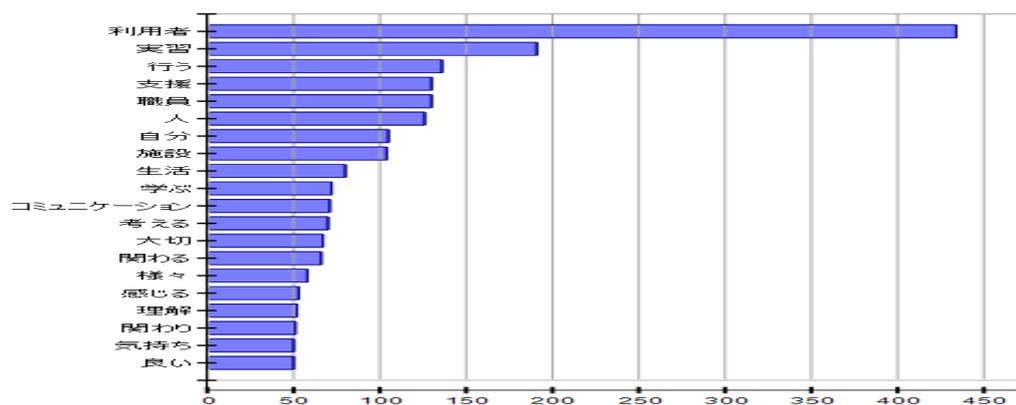


図1 原文の単語頻度 (上位 20 位)

表2 学び①の単語頻度 (上位 20 位) と実習施設種別の単語頻度  
学び① 実習施設種別別

単語	品詞	頻度	品詞	子ども	成人	総合	老人
1 ▶ 実習	名詞	18	名詞	8	6	1	3
2 自分	名詞	17	名詞	8	4	1	4
3 職員	名詞	15	名詞	7	5	0	3
4 関わり	名詞	13	名詞	9	1	0	3
5 支援	名詞	13	名詞	5	4	1	3
6 生活	名詞	13	名詞	4	5	1	3
7 大切	名詞	13	名詞	5	4	1	3
8 必要	名詞	13	名詞	5	2	2	4
9 利用者	名詞	13	名詞	3	6	1	3
10 施設	名詞	12	名詞	6	4	0	2
11 コミュニケーション	名詞	11	名詞	5	4	0	2
12 時間	名詞	11	名詞	4	4	0	3
13 理解	名詞	10	名詞	1	4	1	4
14 気持ち	名詞	9	名詞	4	2	0	3
15 言葉	名詞	9	名詞	5	3	0	1
16 人	名詞	9	名詞	3	2	2	2
17 様々	名詞	9	名詞	4	3	1	1
18 関係	名詞	8	名詞	4	2	1	1
19 行動	名詞	8	名詞	3	2	1	2
20 声	名詞	8	名詞	4	3	0	1

表3 学び②の単語頻度 (上位 21 位) と実習施設種別別の単語頻度  
学び② 実習種別別

単語	品詞	頻度	品詞	子ども	成人	総合	老人
1 ▶ 利用者	名詞	177	名詞	8	98	3	68
2 実習	名詞	61	名詞	9	25	3	24
3 職員	名詞	55	名詞	9	24	7	15
4 支援	名詞	48	名詞	1	37	0	10
5 人	名詞	37	名詞	1	14	11	11
6 施設	名詞	35	名詞	5	17	3	10
7 様々	名詞	29	名詞	1	10	1	17
8 自分	名詞	26	名詞	3	16	3	4
9 大切	名詞	26	名詞	3	11	2	10
10 生活	名詞	25	名詞	3	7	2	13
11 理解	名詞	23	名詞	2	17	1	3
12 コミュニケーション	名詞	22	名詞	3	16	0	3
13 情報	名詞	22	名詞	0	14	1	7
14 地域	名詞	20	名詞	11	0	5	4
15 日さん	名詞	19	名詞	5	14	0	0
16 それぞれ	名詞	19	名詞	0	6	2	11
17 気持ち	名詞	18	名詞	10	6	0	2
18 連携	名詞	16	名詞	0	1	3	12
19 相談員	名詞	15	名詞	0	0	0	15
20 相手	名詞	14	名詞	5	6	3	0
21 認知症	名詞	14	名詞	0	0	0	14

### 3. 評判分析

評判分析をおこなった結果が図2である。好評語で最も多かったのが「支援」で36回、次いで「利用者」で28回、「理解」で19回、「人」で17回、「生活」「気持ち」は同じく13回であった。特徴的なのは、「関わり」（11回）と「信頼関係」（10回）「関係」9回で、10位内に人間関係に関わる言葉が三つ出現した。

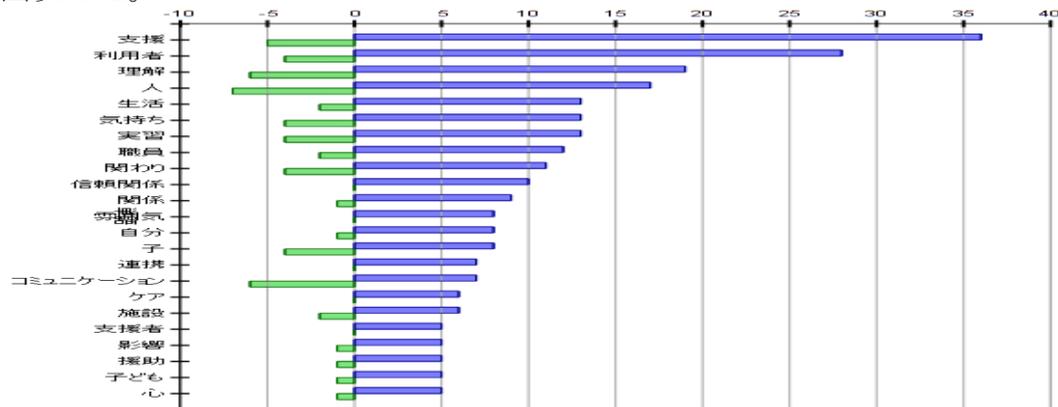


図2 原文の評判分析（名詞上位23位）

### 4. 全体のことばネットワークの分析（話題分析）

ことばネットワークとは、信頼度によって抽出されたことばとことばの共起関係を有向グラフによって可視化する分析である。図3は、多くのことばが「利用者」について語られたことを示している。

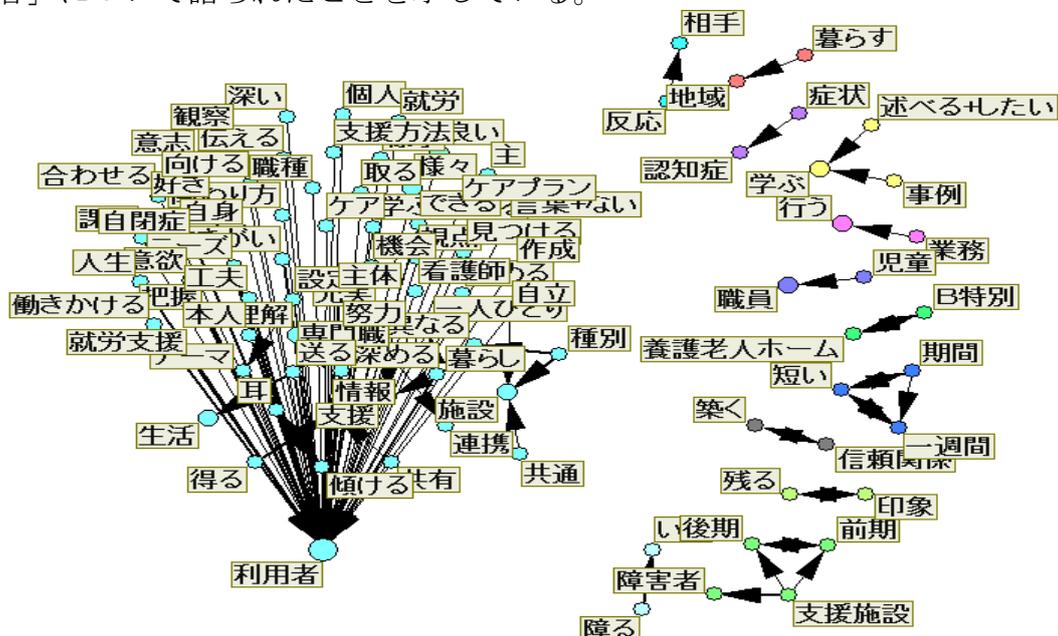


図3 原文のことばネットワーク（名詞・動詞・形容詞上位93位）

### 5. 学び①と学び②の対応バブル分析

図4と図5は学び①と学び②それぞれにおいて実習施設種別と関係のある単語についての対応バブル分析（21名分）の結果を表している。4つの青い丸は

それぞれ「子ども分野」、「成人分野」、「老人分野」、「総合分野」を表し、緑の丸は単語を表している。

図4(学び①の対応バブル分析 上位25位)は、「子ども分野」と「老人分野」と「成人分野」が近くにあるが、「総合分野」は遠く離れていた。「子ども分野」は「自分」「施設」等の単語と関係性があった。「成人分野」は「生活」「利用者」等の単語と関係性があり、「老人分野」は「生活」「大切」等の単語と関係性があった。

図5(学び②の対応バブル分析 上位20位)は、学び①と同様に「子ども分野」と「老人分野」と「成人分野」が近くにあるが、「総合分野」は遠く離れていた。「子ども分野」は「強い」「見る 学ぶ」と関係性があり、「成人分野」は「大切」「利用者」等の単語と関係性があり、「老人」は「様々 一人」「支援」と関係性があった。

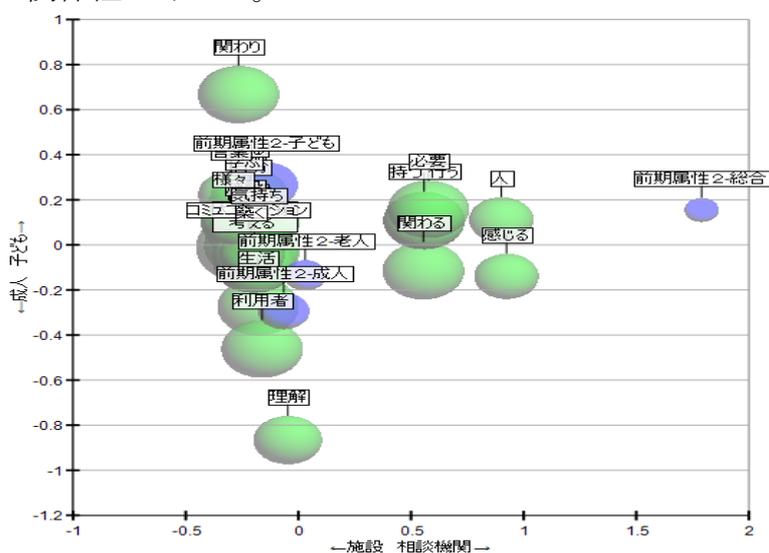


図4 学び①の対応バブル分析(上位25位)

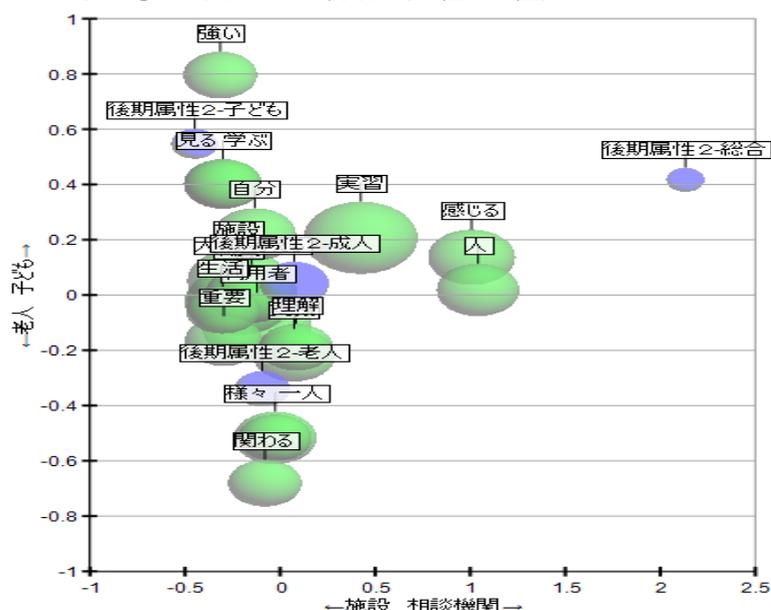


図5 学び②の対応バブル分析(上位20位)

## 6. 原文参照

### 1)原文の単語頻度

全体で頻度が高い単語を原文参照すると、「利用者」は、「利用者一人一人が異なった自立レベルで日々生活をしており、職員の方々は利用者それぞれにあったやり方で支援を行っていた」「実習を重ねていくうちに利用者一人一人の反応の違いを区別できるようになれたことは大きな学びだったと感じる」「利用者の心の声を傾聴し、共感することで安心感が芽生え、それが信頼関係へとつながってくるのだと思った」利用者理解、コミュニケーション、信頼関係について述べていた。

「行う」は、「利用者のニーズに合わせた支援を行っていた」「私は職員の利用者に対するコミュニケーションを観察し、実際に行って見た」等、援助技術について述べていた。

「支援」は、「職員は利用者側からの相談があれば、利用者が就労活動に対し意欲をもって取り組むことができるように具体的な支援を行っていた」「きちんと一人一人を理解しなければ的確な支援は行うことが出来ず、むしろ相手にとって悪い影響を与えてしまうことに気がついた」「おそらくこんなことを思っているのではないかな、とその子の気持ちに寄り添ったり、思いを共有していくことが支援していく際に大切なのではないかと実習を通して思った」等、援助技術、個別化や受容といった価値について述べていた。

「自分」は、「1対1の関わりを強く求める子、試し行動をとって自分に対する職員の愛情を確認する子もいた」「自分が現場に立った時は、利用者の意志を尊重するだけでなく、その人らしさを一緒に見つけ、援助に携わっていきたいと思う」等、子どものことと実習生自身のことを指している場合があり、実習生は自己覚知と将来の理想を述べていた。

### 2)学び①の単語頻度（上位 20 位）と実習施設種別の単語頻度（表 2）

学び①（表 2）でのみ出現し特に「子ども分野」で頻度が高かった「関わり」は「1対1の関わりを強く求める子」「児童との関わりを重ねて行く中で信頼関係や愛着関係の形成をしていくことが必要となる」「…言葉以外の方法があるということ子どもたちとの関わりの中で学んだ」等、関わり的重要性やその技術について述べていた。

### 3)学び②の単語頻度（上位 21 位）と実習施設種別別の単語頻度（表 3）

「総合分野」で頻度が高かった「人」は、「近隣の人との関係が希薄になっている地域も多い」「地域に住むすべての人を対象にしていることを実感する」等公的相談機関や社会福祉協議会における利用者理解について述べていた。

### 4)対応バブル分析

図 4（学び①の対応バブル分析 上位 25 位）における実習種別別対応バブルの「子ども分野」と近い「自分」を原文参照すると、重い障害があるため「自分の気持ちを言葉で伝えるのが難しかったりする子が多かった」と利用者理解について述べていた。「成人分野」と近い「生活」は「…入居前の生活と入所

後の、生活が継続したものになるよう、十分に個人の生活を理解する…」と利用者理解について述べていた。「老人分野」と近い「大切」は「…定期的にケアプランを見直し、日々変化していく利用者さんの状態に合わせて行っていく事も大切である」と援助技術について述べていた。

図5(学び②の対応バブル分析 上位20位)の「子ども分野」と近い「強い」を原文参照すると、「Cくんと担当のお姉さんの間には強い信頼関係が築かれていて…」 「子どもが安心感を抱ける場所や強い信頼関係を築いていくのには、長い時間がかかる」等信頼関係について述べていた。「成人分野」と近い「利用者」は、「利用者の言葉に耳を傾ける」「寄り添い、相手の立場となって考えることで、少しずつ利用者が求めていることが見えるようになった」等援助技術について述べていた。「老人分野」と近い「支援」は「専門職の役割を知ることによってそれぞれの視点から利用者支援を考えることが出来た」「介護職員や看護師、生活相談員など利用者に関わるすべての専門職者が連携を密にとることで、利用者により良い支援を提供できるのではないかと思った」等業務内容や他職種との連携という知識について述べていた。

#### IV 考察

##### 1. 本研究の結果からみた実習についての語り

利用者理解やコミュニケーションという技術領域についての学びと信頼関係という価値領域についての学びが最も多く見られた。次いで自己覚知領域についての学びが多くみられた。実習施設の役割や職員の業務内容や利用者の活動内容などの知識領域に関する語りは少なく、実習生が実体験から学んだ内容が多く述べられている。

##### 2. 実習施設種別による語りの違い

子ども分野では、利用者理解という技術領域と信頼関係という価値領域について多く述べられており、特に信頼関係は「強い」という表現を用いていることが特徴であり、子どもの支援における信頼関係の構築の重要性を学んだと考えられる。成人分野では、利用者理解とその具体的な技術について述べられている。老人分野では、ケアプランの見直しをふまえた個別の支援や他職種との連携強化といった具体的な技術について述べられている。総合分野では利用者理解という技術について述べられている。

##### 3. 先行研究「社会福祉士実習教育における学習成果の検証—実習報告書の分析を通して—」(2009)との比較

竹内ら(2009)による実習教育の学習成果の研究における「コミュニケーション」「信頼関係」「利用者の特性」「関心・関わり」ということばの出現頻度の高さは、本研究においても共通している。実習施設種別による学びの内容の違いについては、先行研究では子ども分野で「関心・関わり」の理解が高いのに対して、本研究結果では子どもの姿をどう捉えるかという「利用者理解」や「信頼関係」の重要性についての学びが多かった。成人分野では「信頼関係」の構築の理解が高いのに対して、利用者理解とそのための具体的な「技術」に

ついでに学びが多かった。老人分野では「コミュニケーション」の理解が高いのに対して、ケアプランをふまえた支援や他職種との連携等の「技術」についての学びが多かった。公的機関・社会福祉協議会等の総合分野では「業務内容」が高いのに対して、利用者理解という「技術」についての学びが多かった。

#### 4. 本研究の実践的意義

竹内ら（2009）は、学習成果の検討結果から、実習生は、利用者の特性を把握し、コミュニケーションを通じて理解を深めながら、信頼関係の構築を目指しており、利用者のニーズ把握を図り、支援のためのアセスメントを行おうとしていることが推察されると考察している。本研究においても共通の考察ができると思う。また、本研究結果から、事前学習において教育目標が実習生に理解され、実習目標の立案とその実践ができていることが示されたと考えられる。特に利用者を個別に理解しようとする姿勢と、理解するための技術を見て学び実践すること、信頼関係を構築することの重要性についての語りが多かったことは、事前学習での学びが実践と結びついたことを表していると考えられる。このことから、今後も実習施設と利用者の特性理解やアセスメント、コミュニケーションの力が身につく事前指導の実施と、実習における気づきや発見を学びに深めるための個別スーパービジョンとグループスーパービジョンの実施と実習報告書の作成を進めていくことを再確認できたことにおいて実践的意義があると思う。

#### 5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、対象者が21名のみに限られていることと、性差や年齢差による詳細な属性による分析がなされていないことである。今後はより多くの対象者からのデータを集積し、より深い分析が求められよう。

#### 引用文献・参考文献

- 1) 柿本誠（2004）.社会福祉援助技術現場実習評価の実態と課題—形成的評価の必要性—.日本福祉大学社会福祉論集(111).
- 2) 竹内美保・藤原慶二・川田素子・工藤歩・中村剛・八木修司・佐藤哲郎（2009）.社会福祉士実習教育における学習成果の検証—実習報告書の分析を通して—.関西大学社会福祉学部研究紀要第12号.
- 3) 金明哲（2009）.テキストデータの統計科学入門.岩波書店.
- 4) 小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈・佐々木彩（2007）.テキストマイニングによるビデオ教材の分析：精神障害者の偏見低減教育のアカウントビリティ向上を目指して.マクロカウンセリング研究(6).
- 5) 服部兼敏（2010）.テキストマイニングで広がる看護の世界.ナカニシヤ出版.